

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

無情岬 長編推理小説

¥ 650

昭和54年8月30日 初版1刷発行

著者 ^{きさ}笹 ^{ざわ}沢 ^き左 ^ほ保
東京都小平市小川東町2028

発行者 小保方 宇三郎

印刷者 鈴木 貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。 (ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Saho Sasazawa 1979

(分)0-2-93(製)02377(出)2271(0)

Printed in Japan

む じょう みさき
無情岬

ささ ざわ さ ほ
笹沢左保



カッパ・ノベルス

『無情岬』 目次

課長というポスト	5
部下という加害者	48
男女という大海原	86
過去という十字路	127
恋愛という裏切者	172
犯人という風媒花	223

イラストレーション

金森達

第一章 課長というポスト

1

二度目の事件は、九月二十日に起こった。それは、あえて二度目の殺人、というべき事件であった。

殺されたのは峰岸喜美夫、二十九歳であった。食肉加工会社としては最大手の『丸養ハム食品』東京本社に勤務していて、所属は総務部営繕課第一係だった。殺された時点は独身だが、二カ月後の十一月には結婚することになっていた。

殺害現場は東京世田谷の岡本二丁目、前田マンション三〇一号室である。峰岸喜美夫は二カ月後に結婚を控えて、このマンションの一室を借りたばかりだった。会社の独身寮からマンションへ引っ越したのが、殺される一週間前のことであった。

前田マンションは個人経営で部屋数が十室、その全室

が2DKである。アパートを四階建てにして、マンションと称しているのにすぎない。場所が神奈川県との境の多摩川に近いことから、家賃が比較的安いということだった。

もちろん、峰岸喜美夫は独りで三〇一号室に住んでいた。殺されたのは、ダイニング・キッチンの隣りの四畳半であった。座卓のうえに湯吞茶碗と、イカの塩辛、それに箸が置いてあり、遺体の脇に日本酒の一升瓶が転がっていた。

この夜、峰岸喜美夫は行きつけのスタンド・バーに寄っている。そこで彼は、銚子八本の日本酒を飲んだ。二子玉川にあるそのスタンド・バーを出たのが十時三十分ごろで、峰岸喜美夫はかなり酔っていた。

二子玉川から岡本二丁目のマンションまで、峰岸喜美夫は歩いて帰ったものと思われる。直線距離にして、約一キロであった。彼は前田マンションの三階の自室へはいると、上着を脱ぎ捨て、ネクタイをはずしただけで、また日本酒を飲み始めたのである。

そして、間もなく殺された。いきなり背後から首を締められたのか、被害者が抵抗したという形跡は見られなかった。絞殺に用いられた凶器は、ダイニング・キッチン

ンにあった電気釜のコードである。

コードは、峰岸喜美夫の首に食い込んだままになっていた。死亡推定時刻は、九月二十日の夜十一時から十二時までのあいだということだった。ほかに外傷はなく、被害者は一氣に絞殺されたものである。

犯人の遺留品なし。

目撃者なし。

物音や叫び声に、気づいた者もいなかった。

犯人のものと思われる指紋も、まったく検出されていない。犯人は手袋を、使用したのに違いなかった。

室内は手ひどく荒らされていて、犯人が物色した跡がはっきりしていた。何が盗まれたかは明らかでないが、現金が十円も残っていないことだけは確かだった。

被害者の上着のポケットに入れてあるはずの財布まで、消えてしまっていた。犯人は現金だけを、狙ったと判断するほかはなかった。室内を荒らしたのも、現金を捜し出すためだったのだろう。

当然のことだが、翌三十一日に峰岸喜美夫は会社へ出勤しなかった。『丸養ハム食品』は、全国十一カ所に工場を持ち、札幌、大阪、福岡に支社がある。東京本社は、港区芝の虎ノ門にあった。

二十階建ての華麗な本社ビルが、日本一の食品企業を象徴している。ビルの三分の一は傍系あるいは子会社が使用していた。残り三分の二が、丸養ハム食品の本社員である八百人の男女の職場だった。

総務部は、十八階の一部と十七階を占めている。営繕課は、十七階の西の端にあった。営繕課は、第一係と第二係に分かれている。第一係は本社、支社、工場の建造物の修築や新築に関することを、一手に引き受けていた。第二係のほうは建造物以外の事務消耗品、機械などの管理調達を任されている。重要な仕事なのに、定員は最少限度に絞られているという営繕課であった。その代わり、課長以下全員が若かった。

営繕課長の佐竹礼児は、三十七歳であった。

営繕課第一係の係長の早乙女一郎は、三十一歳になったばかりである。

第一係に所属しているのは男子が六名、女子が二名だった。六名の男子のうち三名が二十九歳、残りが二十八歳である。女子は二人とも、二十四歳であった。既婚者は課長の佐竹と、係長の早乙女だけだった。

間もなく結婚することになっていた峰岸喜美夫を除いた七人の男女は、純然たる独身者であった。いずれもよ

く働くが、遊ぶほうも嫌いではないという連中で、呑ん兵衛が揃っていた。

九月二十一日の午前十時をすぎても、峰岸喜美夫は出勤しなかった。遅刻するとか休暇が欲しいとかいう電話連絡も、はいらないのである。前例のないことだった。峰岸の遅刻や無断欠勤は、これまでに一度としてなかったのだ。

病気の場合は、必ず電話をしてくる。いや、峰岸喜美夫は力もないし、弱々しい外見だが、病気をしない男であつた。それに、責任感が強い。どんなに二日酔いがひどいときでも、九時までには出社する。

おかしい――。

課長席にいて、佐竹礼児は落ち着きを失っていた。自分の腕時計と壁の電気時計を、何度となく見比べる。だが、時間に狂いはなく、十時二十分、三十分、四十分と的確に針が動いていく。

十日前、九月十一日の朝にも、いまと同じような思いをしている。そのときは、単なる予感には終わらなかつた。午前十一時に警察から、愕然とならざるを得ないような連絡を受けたのであつた。

今日もまた――。

と、佐竹礼児は右端の事務机へ、目を走らせていた。十日前まではそこに、野添真佐子という可愛い顔をした部下の顔があつたのだ。しかし、いまは野添真佐子の顔も姿も、見出しようがなかった。

野添真佐子は九月十日の夜、殺されたのであつた。

まだ、その初七日がすぎて、間もないときである。野添真佐子が欠員となつたあとの補充も決まっていないう空席のままの彼女の事務机のうえには、今日も新しい花が飾つてあつた。

佐竹礼児は、立ち上がった。窓辺に寄つて、赤坂二丁目や二丁目あたりの俯瞰図を眺めやった。もともと彫りは深い暗い感じの彼の顔が、いまは悲壮なくらいに沈みきっている。

「課長……」

背後で、声がした。

佐竹礼児は、振り返つた。第一係長の早乙女一郎が、不安そうな面持ちで立っていた。

「何だね」

佐竹礼児は、早乙女一郎を見おろした。佐竹は長身であり、早乙女は小柄なのである。都会的な美男子の佐竹は三つ四つ若く見られるし、分別臭い顔の早乙女は逆に

三つ四つ考けて見られる。

三十七歳の課長と三十一歳の係長が、向かい合っているという感じではなかった。同年配の男の話し合いと見受けられるし、佐竹のスマートさと早乙女の野暮ったさも対照的であつた。

「峰岸君のことなんです」

早乙女一郎はやや険のある目で、峰岸喜美夫の席を見やつた。

「うん」

早乙女も同じような不安に捉^とまわれているのだと思うと、佐竹礼児はいっそう心配になつた。

「どうも、気になるんですがね」

早乙女一郎は、赤い唇にペロリと舌の先を走らせた。

「同感だ」

佐竹礼児は、深くうなずいた。

「じゃあ、課長もやつぱり……」

「いやな予感がする」

「まさかとは、思うんですがね」

「野添君のときも、何となく悪い予感がしたからね」

「しかし、課長それは考えすぎですよ。出勤が遅れているからって、すぐ当人の死に結びつけることはないでし

よう」

「まあね」

「だったら、遅刻するサラリーマンはすべて、死ぬってことになってしまいます」

「神経質になりすぎているのかもしれないけど、野添君のことがあつて以来、最悪の事態というものを考えてしまふんだ」

「管理職の取越し苦労ってことになりますよ」

「中間管理職の哀れさか」

「それに、偶然すぎますよ。同じ会社の同じ職場に勤務している者が、二人も続けて殺されるなんて、そんな偶然はあり得ないでしょう」

「峰岸君も殺されただなんて、そこまでは考えていない。ただ不慮の事故に遭つたりしてと、想像したくなるんだ」

「ぼくが心配しているのは、急病ってことなんですよ。

峰岸君はいまのところ、ひとり暮らしですからね」

「電話もかけられないような重病となると、やはり死というものに結びつくんじゃないのかね」

「峰岸君としては、前例のないことだけに、気になるんですよ」

「家族が何人も、次々に不慮の死を遂げる。同じ会社の社員が、続けて事故で死ぬ。そういう偶然は、あり得ないことじゃない。むしろ、よく聞く話だろう。そうした出来事を人間はただ偶然として認めず、何かの祟りにしてしまっただけなんだよ」

「十日ほど前に、野添君が暴行されたうえに殺された。今度は峰岸君が、不慮の事故によって死亡する。そうなればやはり、この営繕課第一係は何かに祟られていると考えたくなりますね」

「とにかく、峰岸君の無断欠勤はおかしい。何かあったんだ」

「電話を入れてみますか」

早乙女一郎が、眉根を寄せて言った。

「そうしてもらおうか」

唇を噛んで佐竹礼児は、パチンと親指を鳴らした。

「承知しました」

早乙女は自分の席に戻って、事務机の端に貼つてある小さな表に指先を走らせた。係員全部の住所、電話番号、連絡先などの一覧表であった。早乙女一郎が、電話機に手をのばした。

佐竹礼児は、早乙女係長の後ろ姿を見守った。早乙女

の姿勢は変わらず、彼の声も聞こえなかった。

相手が電話に出るのを、待つていたのである。だが、先方の電話には、反応がないようだった。

佐竹礼児は、胸の奥に痛みを覚えた。悪い予感が、痛みとなったのである。峰岸喜美夫は、マンシヨンの部屋にいて、電話に出られない状態にあるのか。それとも、外泊したのか。

あるいはいま、会社へ向かっている途中なのか。

「電話に、出ませんね」

早乙女係長が、振り向いて言った。

「ほかに、連絡先は……？」

佐竹礼児は無意識のうちに、ネクタイを締め直すような仕草をしていた。

「マンシヨンの所有者の電話番号なら、ここに書き込んであります」

「そこへ、電話を入れてみてくれないか。峰岸の部屋をのぞいてくれて、頼むのがいちばんいいだろう」

「そうですね」

「それで、何か異変があったら、連絡をお願いしますって、こっちの電話番号を覚えておくんだ」

「わかりました」

早乙女係長は、再び電話機を引き寄せた。

「大至急お願いしますって、頼んでくれないか」

佐竹礼児は、椅子に腰を落とした。

課長と係長の緊迫したやりとりは、課員全体に影響を与えるものである。第一係の連中は、早乙女へ緊張した顔を向けていた。第二係の男女社員までが、不安そうな視線を投げかけている。

佐竹礼児は、目をつぶった。野添真佐子が殺されたとき、事件を知った総務部長に佐竹は呼びつけられた。総務部長は、取締役でもあった。総務担当重役ということになる。その宝田という総務部長の言葉がいま、佐竹礼児の脳裡に甦ったのである。

「これは会社にとって、大変に不名誉なことだ。今日の夕刊に、大きな記事となって載るだろう。そこには、丸養ハムという一般に親しまれている社名が、出ることになるんだからね」

「はあ」

「うちの社員が被害者だからって、世間は同情してくれんよ」

「はあ」

「二十三歳という若い女子社員が、夜中の二時までどこ

で遊んでいたんだろう。丸養ハムという会社の風紀は乱れていると、そうした見方をされるんだ」

「はあ」

「野添真佐子はその時間まで、飲み歩いていたそうじゃないか」

「はあ」

「強姦殺人事件だから、三流週刊誌が詳報として扱うかもしれない。その記事には当然、野添真佐子は夜中の二時まで飲み歩いていたと、書かれることになる」

「はあ」

「彼女のほうが色目を使って、犯人となった男を誘ったのではないか。そんな推測記事まで、書かれる可能性がある」

「はあ」

「佐竹君、きみにも責任があるんだ。私生活に干渉しないのは当たり前だとしても、部下の不品行や下劣な品性を黙認していいということにはならない。管理職にあるきみの監督不行届きと、見られても仕方がないんじゃないかね」

「はあ」

「営繕課の諸君はたると、今後そう言われな

めにも、充分に注意してくれたまえ」

宝田総務部長の厳しい顔と声が消えて、佐竹礼児は現実に引き戻されていた。早乙女の席で、けたたましく電話が鳴ったからである。

電話に出た早乙女が、中腰になって机のうえに乗り出した。

異変があったのだ。悪い予感的中したと、佐竹礼児は心臓が縮むような思いだった。

背筋を、悪寒が走った。

「課長……」

電話を切って、早乙女は向き直った。

「前田マンシヨンの所有者からの連絡ですが、峰岸君の部屋はひどく荒らされていて、当の峰岸君は首を締められて死んでいるということですよ！」

早乙女の声が、部屋中に響き渡った。

営繕課の課員二十数名が、総立ちになっていた。

立ち上がらないのは、課長席の佐竹礼児だけであった。

2

峰岸喜美夫の死は、殺人と断定されて、所轄署に特別

捜査本部が設けられた。警視庁捜査一課では、野添真佐子の事件と特に結びつけて、考えるということをしなかった。単純な強盗殺人事件と、見たからである。

しかし、まったく不審な点がない、というわけではなかった。峰岸喜美夫は職業上、多額の現金なり貴金屬類なりを所持しているという人間ではない。また、現金が集まる商店の主人でも、ないのである。

峰岸喜美夫は、マンシヨンにひとり暮らしの若いサラリーマンであり、ボーナスが支給される時期でもなかった。

現金となると、五、六万円も持っていれば、いいほうであった。

そのような峰岸喜美夫を殺してまでも、強盗の対象にするかどうかである。ズブの素人が出来心からということになると、あまりにも用心が行き届いている。指紋ひとつ、残していないのだ。

それに、犯人のために峰岸喜美夫がドアの鍵をあけたものと、見られる点であった。マンシヨンの所有者が、三〇一号室を調べに訪れたときは、ドアは四分の一ほど開放されたままになっていた。

これは、犯人が逃走したあとのことだから、当然であ

る。問題は前夜、犯人が三〇一号室に侵入を果たしたときのことだった。侵入口は、玄関ともいうべき部屋のドアしかなかった。

峰岸喜美夫は、十一時ごろに帰宅した。もう夜も遅いし、出かけることもない。そうなれば、ドアに鍵をかけるだろう。たとえ酔っていたとしても、習慣的に鍵をかけるものである。

そのあと、犯人が訪れた。ドアの鍵をはずさなければ、犯人は室内へ侵入できない。ところが犯人は、室内へはいって来ている。それは峰岸喜美夫が、鍵をはずしてやったことを立証している。

見も知らない相手を、室内へ招き入れるはずはない。もし犯人が強引にドアをあけてはいってくれば、その場で格闘になっただろう。だが、犯行現場はキッチン奥の四畳半であり、峰岸は抵抗する余裕もなく殺されている。

顔見知りの犯行で、目的は二、三万でもいいという金欲しさ。

あるいは、強盗の犯行を装った殺人かもしれない。

しかし、峰岸喜美夫には殺される動機というものが、まったくなかったのである。痴情、怨恨、金の貸し借り、

秘密保持といったことには、彼は無縁であった。

それだけ峰岸喜美夫は、平凡なサラリーマンだったということになる。冒険も背のびもなかったし、良識を重んじて、安全な日々を送ることをモットーとしている。自分のための生活を、自分流に楽しんでいるという男だった。

いずれにしても、峰岸喜美夫の強盗事件が、野添真佐子殺しと関連しているとは考えられなかった。

野添真佐子の場合は暴行殺人事件で、犯人の目的も違っている。犯行現場も、遠く離れていた。

野添真佐子は、美人ではないが男好きのする可愛い顔をしていた。二十三歳の若々しい身体も肉感的で、腰を振って歩く彼女の後ろ姿に口笛を吹き鳴らす若者たちもいた。勤務成績は良好だが、私生活においてはかなり奔放で発展家だった。

九月十日の夜も、野添真佐子は遊び仲間とともに新宿で飲み、ディスコに寄り、十二時すぎに仲間と別れて小田急線に乗った。代々木上原駅で下車して、真佐子は駅の近くのスナックでまた飲んだのである。

正確には、九月十一日の午前二時近くになって、真佐子は上原三丁目にある自宅へ向かった。

そのあとの野添真佐子の足どりを知る者は、ひとりもない。

九月十一日の早朝、彼女の死体は発見された。

上原三丁目の自宅より、百メートルほど手前の地点であった。坂道の途中で、右側が高い石垣、左側が雑草におおわれた空地になっている。その空地よりの路上に、ハンドバッグが落ちていたのを、新聞配達の高校生が見つけた。

野添真佐子の死体は、空地の中央の雑草に埋まっていた。下半身が、むき出しになっていた。左右の靴、パンティ・ストッキング、パンティを脱がされて、完全な半裸の姿だった。

両手で絞め殺したあと、野添真佐子のベルトでもう一度、首を絞り上げている。念を入れた絞殺であった。

検出された犯人の体液はA型という血液型だった。バッグの中身に手をつけてはいないし、強姦だけが目的の犯行ということになる。

この暴行殺人事件についても、捜査本部の一部の係官から異論が出されたのである。それは、果たして強姦かという疑問であった。真夜中とはいえ、女の悲鳴や犬が吠え立てる声を、聞いた者がひとりもない。

被害者に抵抗した形跡がなく、衣服が破れたり泥で汚れたりしてはいない。左右の靴も遠くへ飛んではいなし、ストッキングやパンティの脱がせ方も、乱暴に強引にという感じがしない。

それに被害者のブラウスの前が開いていて右の乳房がこぼれ出ているのに、ボタンがひとつもちぎれていない。丁寧にボタンをはずしたとすれば、それは被害者の意志によるものである。

和姦なのではないか。

では、なぜ男は女を、殺さなければならなかったのか。まず考えられるのは、セックスのあとで争いになったということである。たとえば女が男に、責任をとれとか、金品をよこせとか、このことを誰それに言い付けるとか、迫った場合であった。

そうでなければ、男が強姦殺人に見せかけようとしたのではないか。和姦を強姦と装って、殺すのである。目的は、殺人にあったのだ。だからこそ、念を入れて絞殺したのではないか。

しかし、この異論は結局、受け入れられなかった。いきなり被害者の首を締めて失神させてからのことであれば、和姦も変わらない状態になる。それに、野添真佐子

に殺される動機がないという二つの理由で、異論は通らなかつたのである。

この野添真佐子殺しと峰岸喜美夫殺しを、結びつけて考えることは難しい。ただ二人が同じ会社の同じ職場に勤務していた、ということだけなのだ。そのことは二人の被害者の共通点ではあるが、二つの事件の接点にはならない。

丸養ハム食品の総務部営繕課第一係に勤務する二人の人間が、十日において相次いで殺されたのは、単なる偶然にすぎないのではないか。二つの特別捜査本部は、それぞれ互いにそう判断していたのである。

だが、丸養ハム食品の本社では、どの職場も一種の混乱状態を迎えていた。本社ばかりではなかつた。全国の工場や支店から、それとなく問い合わせが寄せられていた。本社の社員、それと同じ営繕課第一係の人間が相次いで殺されたのは、偶然にすぎないのか、という問い合わせだった。

丸養ハム食品の首脳部も、深刻な気持ちで事態を受け止めていた。頭をかかえていたのである。社員が十日おきに二人も殺されたということは、決して企業イメージのアップにはつながらない。

被害者だろうと殺人事件にかかわりを持つ企業に対して、敬遠の気持ちを抱くというのが日本人の国民性であった。特に日常の必需品を供給していて、テレビのコーナーシャルでもお馴染みの企業となると、理由もなく世間は嫌悪感を持ってしまふ。

マスコミ攻勢も、容赦しなかつた。待っていましたとばかりに、いろいろなかたちで記事にする。それが世の中に歓迎されるニュースであれば、十数億円の宣伝費にも相当するくらい、『丸養ハム』か『丸養ハム食品』の社名が活字となつたのだ。

しかし、残念ながら企業イメージがダウンするような記事ばかりであり、最悪の場合には製品の売り上げにも影響しそうであった。なぜか業界最大手の企業となると、マスコミは批判的な姿勢をとるのである。

丸養ハムの怪！

丸養ハム食品の社員が十日おきに二人も殺された事件を、裏側から分析してみた場合は……。

CM『丸養ハムを食べてなぜか笑いが浮かぶ』を『丸養ハムを売ってなぜか殺された』にしてしまった本社の男女社員。

男は強盗殺人、女は暴行殺人。偶然とは思えない丸養ハム本社の連続惨事。

何かのタタリではないかという声まで出る丸養ハムの社員たちの混乱ぶり。

企業拡張、社員の苦勞、私生活の乱れ、殺人事件という因果關係。

二人の被害者は殺されたとき、ともに泥酔していた。丸養ハムの社員は、アルコールが好きだった。

一流週刊誌を除いては、このような見出しによる記事の扱い方がほとんどであった。丸養ハム食品としては、時間が解決してくれるのを待つほかはなかった。半月もすれば、世間もマスコミも忘れてくれるだろう。

反論のしようがないし、対策を講じたり解決したりすることができない問題なのだ。外部に対してはひたすら沈黙を守り、新たなニュースの素材を与えないようにする。それが、丸養ハム食品の首脳部の姿勢だったのである。しかし、その首脳部も内部の者には、かなり厳しかった。社長からの特別伝達事項として、本社の全社員に次の三点についての要望があった。丸養ハム食品では、前例のない社長からの呼びかけだった。

一、世間を騒がせ会社の信用を傷つけるといったことがないように、責任ある個人行動をとる。

二、マスコミの取材には、慎重な態度で応ずる。

三、私生活に関しては、あらゆる意味で身の安全を図り、用心、注意、警戒を忘れないこと。

さらに、首脳部の営繕課に対する風当たりは、想像以上に強かった。営繕課員の全員が総務部長室に呼ばれて、宝田総務部長から三十分近く事態の重大さを説かれた。それは訓示ではなく、嫌味をまじえた説教だった。

そのあと、佐竹礼児と早乙女一郎だけが、部長室に留まるように命じられた。宝田部長は露骨に、不機嫌な顔をして見せた。二人に着席もすすめなかったし、犯罪者を取り調べる刑事のように、宝田部長はしばらく沈黙を続けていた。

「佐竹君、きみの感想を聞こうか」

やがて宝田総務部長は、立ち上がりながら口を開いた。「はあ……?」

佐竹礼児は、宝田部長の姿を目でおった。感想を聞こうかという言葉に、佐竹礼児は意表をつかれたのであった。「きみの感想だよ」